

コリント人への手紙第二 第4章 18節

「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」

普段は見えるものに注意し生活している。駅頭に入ってくる電車、交差点を行き交う車体、路上を走る自転車、さらには口に入る食べ物等々良く見ての生活である。当然なことではあるが、そうでないもの、見えないものにもこころの目を留めることが大事であるという。そう言われると改めて気付かされることがある。今は丁度、鳥の音が響き、花の香が漂う季節である。目に見えないものがいのちの豊かさを明らかにしている。これらは、季節が過ぎれば去って行く。

他にも目に見えないものの大切さを教えることがある。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制とこれらすべては先ずこころに宿るものだ。手に取って見れるものではない。そして、鳥の音、花の香と異なり季節と共に過ぎ去ることはない。それでも、場合によってはこころが枯れいつか消えてしまう可能性がある。見えないものだけにはかなさがつきまとう。

だが、見えないものはいつまでも続くとある。鳥の音、花の香が示すいのちの豊かさ、そして様々なこころの豊かな姿はいつまでも続いて欲しい。見えない主なる神を見るこころを与えられて。

2022年5月28日